

## 博士論文審査要旨

論文提出者： 朴 裕河

論文題目： 日本近代文学とナショナル・アイデンティティ

主査：	早稲田大学教授	東郷 克美
副査：	早稲田大学教授	千葉 俊二
副査：	早稲田大学教授	金井 景子
副査：	早稲田大学名誉教授	榎本 隆司
副査：	東京大学教授	小森 陽一

### 1、本論の目的と構成

本論文の目的は、ナショナル・アイデンティティの形成において文学が果たした役割に着目し、日本近代文学の言説を分析することを通して、近代化の過程でナショナリズムはどのように醸成されるかについて解明することにある。分析の対象として、近代日本文学を代表する一人である夏目漱石の小説および評論を中軸に据え、森鷗外の小説『舞姫』、柳宗悦の朝鮮関連の評論、在日朝鮮人作家である金鶴泳の小説および評論、植民地末期の韓国文学、そしてワシントン・アービングの『スケッチブック』の近代日本における受容史が配されている。

本論文がナショナリズムの問題にアプローチする際に文学言説を分析の対象にするのは、文化の中でもとりわけ文学がナショナル・アイデンティティを支える中心的役割を担ったという認識に立脚している。文学は「国語」信仰と相俟って、美術や音楽と比較しても、それが言語の習得や考え方・習慣の理解を前提としている点で、最も閉鎖的な排除の体系としてナショナル・アイデンティティ形成に寄与する側面を有しているとも指摘している。こうした点に本論文の筆者・朴裕河氏が着目しえたのは、氏が日本文学を「国文学」＝自国の文学として学ぶ大多数の日本文学研究者とは異なり、「外国文学」として学ぶ少数派に位置していることに負うところが大きいのは言うまでもない。しかし、そうした外国人研究者としての位置の問題以上に重要なのは、朴氏が同時代のナショナリズムが生み出す諸問題——ことに韓国と日本との関係性において、今なお続いて

いるそれぞれのナショナリズムに起因する誤解や対立に、極めて鋭敏な眼差しを注ぐ評論活動を展開していることであろう。とりわけ日本に対抗的な立場からの韓国ナショナリズムをめぐって、朴氏は『誰が日本を歪めるのか——世紀末韓国精神分析——』（2000年）と題する著書を刊行し、韓国論壇に大きな反響を呼んだ。世界的に見ても、二十世紀の最後の十年は、東西の冷戦が終わり、情報や経済のグローバリゼーションが急激に促進された一方で、第二次世界大戦以後、最も激しい民族紛争が繰り広げられた。また二十一世紀の幕開けは、テロを引き金として新たな国家間の対立が戦争へと拡大している。こうした状況下、大国意識に裏打ちされた覇権主義の言説としても、また自国を侵略から防衛するための抵抗の言説としても、ナショナリズムを醸成することばは世界中に横溢している。そうした中であって、朴氏は、言論界で近年盛んに行われている同時代的なナショナリズム批判をより深化させて、ことばや文化、血縁の同質性をその根拠とするナショナル・アイデンティティ自体を歴史的に問い直す作業——ナショナル・アイデンティティそのものが今まで信じられてきたように本質的なものでも不変なものでもないことを、韓国と日本双方の関わりを視野に入れて検証しようと試みている。本論文は前掲の評論とともに、その中核をなす業績である。

本論文では夏目漱石の言説を取ってその他の表現者たちの言説と併せて論じることにより、漱石のみに日本近代文学を代表表象させないスタンスをとっている。氏は日本近代文学の抱える問題を漱石文学に集約させて考えるのではなく、漱石から日本へ、そして今日に繋がる近代の問題を明らかにすることを志向しているのである。

本論文の構成は次のようになっている。

## 序 近代・文学・ナショナル・アイデンティティ

### 第一節 問題意識

### 第二節 研究動向

### 第三節 目標と意義

## 第一部 漱石とナショナル・アイデンティティ

### 第一章 別れる理由——漱石のロンドンテキストが語るもの

#### 第一節 数量化される他者

第二節 近代主義志向

第三節 創られるナショナル・アイデンティティ

第四節 欠如としての西洋

## 第二章 文明観と擬似植民地的恐怖

第一節 「活力」としての開化

第二節 「侵食」への恐怖

第三節 「敬服」への欲望

第四節 共謀するオリエンタリズムとナショナリズム

## 第三章 「西洋」のおみやげ——「現代日本の開化」と「私の個人主義」

第一節 強者主義と倫理

第二節 「自己本位」とコミュニケーション

第三節 国家主義容認と不平等の思想

第四節 東洋の秩序・西洋の自由

第五節 秩序とナショナリティ

第六節 国家と個人

第七節 「則天去私」の秩序

## 第四章 「東洋」への回帰——『草枕』

第一節 <反西洋>の言説

第二節 「温泉」の意味

第三節 文明批評の矛盾

第四節 「憐れ」と女

## 第五章 排除の欲望——『坊っちゃん』

第一節 「東京」という中心

第二節 「廿五万石」の「都」

第三節 侵犯への恐れ

第四節 境界・根拠・流浪

第五節 「清」の願望

第六節 『坊つちやん』と日本人

第六章 アジアという他者性——『満韓ところへ』

第一節 二つの中国像

第二節 南満州鉄道株式会社

第三節 風景としての中国

第四節 「文明」の容認

第五節 漱石の植民地観

第七章 「インデペンデント」の陥穽

第一節 模倣する〈言葉〉

第二節 〈開拓〉の場所

第三節 戦争・文明・帝国主義

第八章 跳躍と懷疑——『それから』

第一節 闘うナルシシズム

第二節 〈男〉の条件

第三節 〈父〉の言葉

第四節 「個人」の誕生

第五節 懷疑の行方

第九章 子供不在の意味——『門』

第一節 宗助の挫折

第二節 「近代家族」の失敗

第三節 懷疑と断罪

第四節 秩序志向の異性愛

第十章 漱石とショーペンハウアー

第一節 過去の匂い

第二節 文体観ほか

第三節 愛と種族保存

第四節 利己心と偽り

## 第十一章 恐怖と不信——『行人』

第一節 女という他者

第二節 恐れと不信

第三節 期待と教育

第四節 「士人」の交わり

## 第十二章 『行人』と沼波武夫『始めて確信し得たる全実在』

第一節 沼波武夫への共感

第二節 マホメッド逸話ほか

第三節 「塵勞」執筆まで

## 第十三章 個人主義の破綻——『こゝろ』

第一節 「現代」批判としての「明治の精神」

第二節 男共同体の「精神」

第三節 「私」——新しい「命」への幻想

第四節 反革命主義・反西洋主義

第五節 様々な言説

第六節 文豪誕生

## 第二部 ナショナル・アイデンティティの諸問題

### 第十四章 <国医>鴉外の選択——『舞姫』

第一節 エリスの条件

第二節 「趣味」と教育

第三節 男の仕事・女の愛

第四節 「故郷」という呪縛

第五節 「国医」 鷗外

第十五章 柳宗悦と近代韓国の自己構築について

- 第一節 「愛」する主体
- 第二節 <欠如>の記号
- 第三節 「芸術」の政治学
- 第四節 「誇り」と支配
- 第五節 他者の影

第十六章 <在日>金鶴泳の沈黙

- 第一節 ナショナル・アイデンティティの強制
- 第二節 「沈黙」の暴力
- 第三節 <在日>という場所
- 第四節 存在の条件
- 第五節 「朝鮮」人金鶴泳

第十七章 植民地末期韓国文学に見る「日本」のイメージ

- 第一節 秩序と法律
- 第二節 ナショナル・アイデンティティ習得の諸相
- 第三節 「個」の放棄
- 第四節 「全体」としての天皇
- 第五節 植民地人の欲望

第十八章 ハイブリディティとしての近代

——ワシントン・アービング『スケッチブック』と「日本近代文学」

- 第一節 アービングと明治の青年たち
- 第二節 教科書とスケッチ・ブック
- 第三節 「文章」から「文学」へ
- 第四節 スケッチ・写生・近代

## 第十九章 まとめにかえて

### 第一節 漱石テキストの男たち

### 第二節 漱石の神話化と江藤淳

### 第三節 ナショナル・アイデンティティの諸問題

### 第四節 <近代>からの解放をめざして

## 2、各章の内容と論評

まずはじめに「第一部 漱石文学とナショナル・アイデンティティ」に収録されている一章から十三章について述べた後、「第二部 ナショナル・アイデンティティの諸問題」に収録されている十四章から十九章について述べることにする。

### 第一章 別れる理由—漱石のロンドンテキストが語るもの—

この章では、漱石が初めて公にした文章である「倫敦消息」や渡航・イギリス滞在中の日記や書簡を分析対象として、それらに看守できる「西洋」＝「文明」に対する漱石のアンビバレントな姿勢を指摘している。イギリスのロンドンに滞在した際、漱石は目にする「西洋」を常に数量化し、日本との比較において優劣をつける傾向を見せており、発展至上主義的で進化論的な価値観を覗かせた。そうした「西洋」＝「文明」に対する漱石の劣等感、西欧社会におけるアジアに対する差別的認識を内面化したものである。漱石は近代化の過程で日本という主体が希薄化することを危惧して、西洋に「追い付き、西洋を「敬服」させたいという欲望をもつようになる。漱石が陥った「黄色い」という自己認識はイギリスにおいて始めて作られたものであり、それは漱石が、他者との出会いこそが「自己」確定の契機となる「近代」という時代にいたことを示す。漱石の警戒意識は強い自己尊大意識と他者に対する意味解釈の過剰ゆえのことだったが、「自己」確立への強い欲望を持つようになった漱石は以後、「西洋」に「文学」で対抗することを考える。

洋行体験が漱石の自己発見のきっかけとなり、そこでは自己が、文明化された「西洋」への劣等感を内在させた、立ち遅れた「日本」を背負うものとして自覚化されたことは従来の研究史でも指摘されていた。しかし、その劣等感が西欧社会におけるアジアに対

する差別的認識を内面化したものであると論破した点や、劣等感の裏返しとしてイギリス嫌悪の感情が生み出されている事態を、「「後進国」の若い市民にふさわしい「世界的野心」」（滝沢克巳）と評価したり、他の留学生のごとく追従模倣に走らず劣等感に直面した結果（伊豆利彦）であると擁護してきたこれまでの評価の在り方を問い直した点は、まさに漱石を他者の視点から検証する重要な批評である。

## 第二章 文明観と擬似植民地的恐怖

この章では、「戦後文界の趨勢」をはじめとしてイギリスから帰国後に執筆された評論を対象にして、漱石の「開化」観を分析している。漱石にとって「開化」とは集合意識の頂点を示すものだった。漱石は決して「開化」を否定してはおらず、むしろ「開化」のための競争は肯定的に捉えられていた。ただし、その「開化」は漱石には「外発的」「不自然」なものにしか見えなかったが、それは日本の開化を西洋による「侵食」と考える認識があったためである。そのような意識は西洋の開化こそが「自然」なものであり、その分、強いとする思考に基づいていたが、そこには「開化」や「文明」に対する漱石の誤解がある。日常における西洋の文化的「侵食」を恐れる漱石の恐怖は、「神経衰弱」をも当然視することになっていく。

帰国後、苛まれていた「擬似植民地的恐怖」から脱却すべく、漱石がとった戦略は、周知のように「自己本位」であり、それを支えたのは日本の「特殊性」をもってすれば太刀打ちできるという考えであった。漱石が日本における西洋風様式の定着に否定的だったのは恩師・ケーベルの影響が大きいと考えられるが、ケーベルの憂慮は、日本についての充足されないオリエンタリズムを基盤にしている。漱石にそうした言説を受け入れさせたのは日本を西洋に侵食されまいとするナショナリズムであり、そこには西洋人・ケーベルのオリエンタリズムと日本人・漱石のナショナリズムとの共犯関係を見ることができる。漱石の「擬似植民地的恐怖」は日露戦争の勝利をきっかけに「軽蔑」に変わり、「誇り」への欲望となる。漱石が夢想した「日本」の固有性とは、日本という共同体がその構成員に強制し、結果として慣れさせた規範のことにすぎない。漱石という人物と文学自体が、英語と日本語で綴られたノートのあり様が語っているように、ハイブリッドな存在だったことを想起すれば、「純粹」な日本であることなど幻想にすぎないことは明白なのであるが、二十世紀はこのハイブリディティが執拗に排除された時代でも



あった。

本章で評価されるのは、オリエンタリズムとナショナリズムとの共犯関係に言及した点である。西洋に圧迫され、何とか日本の今後の活路を見出そうとしていた新婦朝者・漱石は、日本をその特殊性において評価するケーブルと出会うことにより、純粋な日本の存在を裏書されることになる。また、純粋幻想に陥って行く漱石自身が、そのノートに集約的に表象されているように異種混交的であったとの指摘は、漱石自身が自らの主体の可能性を自覚化していなかったことの証左であったが、これは漱石に限らず、明治から今日に至るまで見られる、日本における新婦朝者の一つの傾向であろう。漱石論の一時代を画し、本論文でも再三言及されている江藤淳を想起するのも容易い。審査委員会においては、今後の課題として、同時代あるいは次世代以降の新婦朝者たちと比較検討することも有効であろうとの意見が出された。

### 第三章 「西洋」のおみやげ―「現代日本の開化」と「私の個人主義」

この章では、漱石の評論の中でも、先行研究が集中する「現代日本の開化」と「私の個人主義」を分析検討している。

「現代日本の開化」は、すでに第二章で確認した、漱石の開化観、西洋への警戒意識、「日本」という一様の集合意識の存在を前提としたナショナル・アイデンティティへの信頼、異文化受容にたいする誤解を改めて確認させてくれる。「西洋」を強いものと考える恐怖に基づき、「日本」もまた強くなることへのこだわりは、漱石の強者主義を露にしている。強くなり得なければ侵略されることも止むなしと考えることによってもたらされた「擬似植民地的恐怖」が、強者の侵略自体にたいする警戒の声とは似て非なるものだったのは、日露戦争時に見られるように日本が実際に「強者」になってアジアの「侵略」に乗り出したときの漱石の姿勢と発言が現している。

「私の個人主義」でも、「国民」的感受性の存在が前提となっているが、「国家」共同体の感受性が一樣なものでありえないにもかかわらず、漱石は自己の感受性に合う俳句的感受性を「日本」として表象する。たとえば「日本」独自のものがあるとしても、それは「源氏物語」や「歌舞伎」の世界など、「俳句」の世界のみには収斂し得ない複数の「日本」が想定されるはずなのであるが、「私の個人主義」においてそうした複数性は自覚されていない。本論文では、漱石の「自己本位」とは文化帝国主義を批判するものと

いうよりは、擬似植民地的恐怖を基に国民に攻撃をも視野に入れた「警戒」を促す、ナショナリズムの言説に酷似していると指摘している。

また、漱石の個人主義は国家主義を容認するものであることにも注意を喚起している。そこでの「個人」とは「人格を積んだ」エリートであって、漱石の個人主義は実は「平等」をみとめていない。日本において「文明」＝「教育」度の高い男性エリートたちの優位を認めた上で、彼らを「国家」の中心に置くその思想は、外部にたいしても例外ではなく、漱石が、日本のアジア侵略を容認したのはその個人主義思想自体のもつ限界によるものだったと論及した。

もともと漱石は西洋＝個人主義＝自由＝不安、東洋＝関係優先＝秩序＝心の安定、というような枠組みで東洋と西洋を認識し、西洋に対して否定的な評価を行っていた。西洋に対抗すべく「個性」の発達を重視する一方で、自由をもとめる個人主義の発達は趣向の多様さを招来して「国民」としての共通な趣向を失うことになると考えた。人々が「ばらばら」になるとの嘆きはそのことにほかならず、そのような状態は「永久な文学」の危機を招くと危惧している。加えて漱石は「国家」の「調整」（介入）を緊急なものとまでするのである。

本章は、本論文全体の中でも最も重要な分析および論考の一つである。近年の夏目漱石研究は、ポストコロニアリズム批評に触発されて活性化しつつあるが、そこでは漱石の個人主義が文化帝国主義への抵抗として提示されている（小森陽一）という観点に止まっており、秩序主義・国家主義的側面を内在するものであるとの根本批判には至り得ていなかった。漱石にとって「個人」とは「国民」の「集合意識」の恒久的な存続のために存在するものであり、「個性」の発達を主張したのも最終的には「日本」という「全体」の「特殊」性を発現する方途であったということ、そのために「強く」なることを志向する漱石の「個人主義」には外部とのコミュニケーションの可能性を見出し難く、思想的にはむしろ全体主義的個人主義と位置付けるべきであるとの指摘は、漱石研究史において画期的なものである。加えて朴氏は、これまで日本の知識人たる夏目漱石が最後に到達し得た境地として、漱石神話の中核と目されてきた「則天去私」思想を、秩序への順応を語るものであり、漱石の「個人主義」は秩序と対峙せず、むしろ連繋するものであったと結論づけているが、この指摘は漱石の「個人主義」の在り方に近代知識人の良心的な典型を看守してきた日本の近代文学研究に再考を促す衝動力を有するものとして、審査委員会でも高い評価を得た。

#### 第四章 「東洋」への回帰——『草枕』

この章では、漱石の西洋にたいする対抗意識をもっとも顕著に表しているテキストとして『草枕』を取上げている。『草枕』は漱石自身によって「美しい感じ」を志向する「俳句的小説」であるとの自註が付されてきたが、同時それが日本はむろん「西洋にもない」、「世界」に拮抗すべきテキストを目指したものであることを言明している。また同作品はその物語内容においても「反西洋」を志向しており、文学をはじめ西洋の芸術作品がことごとく批判されている点も看過できない。その批判の頂点に位置付けられたのがミレーの絵画であり、『草枕』の主人公である画工は、ミレーに典型化された西洋型の美を志向するのではなく、反西洋の構図の中で独自の絵画美を追究すると揚言している。

本論文では、『草枕』の舞台として「田舎の温泉」が選ばれていることにも必然性が見出されている。反都会志向に加えて、画工にとってそこがもっとも「東洋」的な場所であり、温泉で「昔」を夢想するのはプリミティブへの欲望にほかならず、最後に「憐れ」という伝統美が用意されているからに他ならないとしている。「昔」は画工にとってもっとも「非西洋」的な時間であり、そこでミレーの画（西洋）を思い起こすのは、西洋への対抗意識を背景においた「自己本位」的発想であった。「温泉」という「東洋」的な場所で、女は眺められる存在となり、男は美の創造者となるという構図は、文明人である男が、自然で野蛮な存在としての女を、「憐れ」という伝統美の中に封じ込めることでもある。

この章に至って論者は、『草枕』が、「文明化」しつつある恐怖の中で「伝統」を確認・保存しておきたいとする、ナショナル・アイデンティティをめぐる男の欲望の物語であると捉えている。これは、ナショナル・アイデンティティが構築される際に、自然や伝統が女性ジェンダー化されて表象されるという問題に照明を当てるものであり、『草枕』が文化帝国主義の発想を内面化したテキストであることを炙り出した先端的な論考である。

#### 第五章 排除への欲望——『坊っちゃん』

本章では、『坊つちやん』が「田舎」に対する差別小説であると同時に、赤シャツに集約されるような西欧追随主義批判の両側面を持つテキストと捉え、そこに漱石の、「日本」の中の「野蛮」を制圧し排除しながらも「西洋」＝他者の視線を意識する姿勢を読みとっている。当時は「田舎」と「都会」の区分はまだ定着していなかったが、『坊つちやん』にはいわば後に確定されるであろう地域間の対立が先取りされており、そこでは未知の他者への恐怖が否定的表象を絶えず作りだし、根源・本質主義を助長する。「田舎」が「不浄」の地とされた背景には異質なものを絶えずひとつの表象の中に囲い込もうとする選別と排除の運動があり、本論文はそれを、みんなが「平等」になったはずの時代における国民統合の新たな動きと意味付けた。

『坊つちやん』とは都会と田舎の間で相互に生み出される恐怖と排除のための囲い込みへの欲望の物語であるという本章の主旨は、これまでの研究史とも連動するものであるが、これをナショナル・アイデンティティの創出に関連させたところに独自性が認められる。ただ、本章に関しては、審査委員会において、『坊つちやん』という小説のキャラクターの認識と漱石の認識とを、より厳密に分析する必要があり、ことに『坊つちやん』の価値観を相対化している語り手の在り方をどのように評価するのかという疑義が呈された。

## 第六章 アジアという他者性——『満韓ところへ』

本章では、『坊つちやん』における問題点——都会・文明中心主義とそれにとまなう差別意識が、植民地になりつつあった場所である韓国と満州を旅行した時の紀行文『満韓ところへ』にもっとも明確に表れているとの論及がなされている。

漱石が中国に対して残している肯定的な発言は、慣れ親しんだ古い「文化」に関するものであり、旅先で遭遇する現実の中国人・朝鮮人に対しては漱石は閉口し、異質な習慣に反感を示す。彼らに対する視線は抽象的だが、支配下にある人間に対しては好意的であり、その関係を本質なものとする傾向がある。また、「開化」されて「日本」化されている地域に対する見方も肯定的で、それは漱石の発展至上主義・文明主義を示しており、また、「日本」のために「個人」を犠牲にしていた植民地開拓者たちに対して「頼もしい日本人」と評価することに典型的に表象されているように、国家主義的発想も見とれる。漱石にとって満州進出は「男子会心の事業」だったのである。そしてその「事

業」が作り出した風景を「純粋な日本の開化」としているように、日本が主導する「開化」に対しては肯定的であった。

本章において論者は、『満韓ところへ』には、男性の植民地における「冒険」精神を触発するような発言が開示されており、こうしたことを踏まえれば漱石もまた日本の植民地政策を追認していたと捉えるべきで、そのことは時代性ということで免責されるものではないと明言している。かつて『満韓ところへ』論として学会発表された際、当時という時代を勘案しないことへの批判があったが、本審査委員会においては、ナショナル・アイデンティティの観点から再編成された本論文の本章には十分な妥当性があることが確認された。

また、「第七章 「インデペンデント」の陥穽」においても、本章の主旨は引き継がれており、『満韓ところへ』に頻出する「衛生」の観点に対して、「清潔」度で文明度を測る帝国主義的視線という点で帝国主義の先端に立っていた南満州鉄道会社の人たちと変らない立場と指摘した上で、その在り方を福沢論吉や後藤新平らの言説と連動するものと捉えている。

#### 第八章 跳躍と懐疑——『それから』、第九章 子供不在の意味——『門』、第十章 漱石とショーペンハウアー

第八章では、『それから』を漱石の個人主義がその可能性を見せていたテキストとして分析している。主人公の代助は、自分の美に対する関心が深いが、それは従来の研究史が指摘するようなナルシスト的な次元のものというより「男」の言説に対抗してのものと見るべきであるとし、彼は「度胸」「胆力」こそが「男」の持つべきものとする父の価値観に抵抗し、「国家」の期待の地平に応えていないことで、富国強兵を目指す近代国家の言説に対抗していると評価した。

「因縁」を重視した結婚を勧めようとする父に対して「自分で拵えた因縁」を重視する代助の姿勢は、共同体の規範より自己を優先視する個人主義に立脚してのものである。そして、父親が重視する「義理」「義侠心」という共同体の規範を重視して三千代を平岡に譲った過去が代助にはあったのだが、代助はそのことの抑圧性に気づくようになっていく。父に抵抗することは伝統的価値観を否定することであるだけでなく、「男」の価値観、さらには「国家」の秩序に抵抗することだった。代助は「自己」の欲望を「生活欲」

と呼び、三千代を取り返すことで伝統的な「道義欲」への反乱を試みる。

しかし、代助は「生活欲」を重視する個人主義が「我」の拡充を呼ぶ「西洋」からのものと考えていて、完全にその呪縛から解き放たれているわけではない。そこでテキストの末尾には、共同体の秩序を壊してしまうことへの懷疑や不安が、露呈することになるのである。漱石が、主人公の選択＝制度を逸脱する恋の完遂を、社会秩序を破壊するものと見なし肯定的に捉えていなかったということは、『それから』の続編と位置付けられる『門』においても明かである。

「第九章 子供不在の意味—『門』」において描かれる夫婦像には、亀裂が入っており、夫の宗助は妻・お米との過去を「あやまち」として認識している。彼は一貫して自分の家を「欠如」の感覚でとらえ、子どもと仕事に恵まれないことを自分達の選択に対する懲罰的な運命と認識している。

お米の感性は、「産む性」としての女性規定が強まった近代国民国家のものである。将来の「国家」の力になるはずの「子供」をもうけない家庭は「近代家族」ではありえず、宗助とお米は「近代家族」を作れない焦燥感でそれぞれ神経衰弱とヒステリーを病んでいる。

第九章では、『門』というテキストは姦通した男女を後悔させ、不幸な姿として描くことで姦通を断罪しており、これは結果的に異性愛主義に基づき、女＝産む性の規定のものであるとして、異性愛主義に基づく一夫一婦制が婚外の交渉を禁止した家父長制的近代国民国家の秩序を志向することになっていると指摘している。『それから』において可能性として提示されていた家父長制批判の観点は、『門』においては十全に活かされることなく、むしろ家父長制的近代国民国家の秩序を逸脱する者を罰する方向性に回収されたことを批判している。

この主題は、続く「第十章 漱石とショーペンハウアー」においてもさらに深化されており、『門』における「子供」と結婚の関係に関する考えにはショーペンハウアーの影響が大きいことを実証している。

以上、第八章から第十章は、漱石が明治の家父長制に対して果敢な問い直しをしているにもかかわらず、その帰結において制度を追認する事態を招来していることを指摘しており、作品を別個に論じるこれまでの研究史にはない貴重な視点が提起されている。

## 第十一章 恐怖と不信—『行人』、第十二章 『行人』と沼波武夫『始めて確信し得たる全実在』

第十一章と十二章では、『行人』についての論考がなされている。『行人』は、心を支配できない女に恐れをいただき、他者化し、その結果として関係を結ばず孤独に陥った男の物語である。一郎は妻の愛を不変、あるいはますます高まるべきものとしているが、お直からその確信を得られず、女は「信頼」できないものとされている。それは女の「心」をも所有したい支配の欲望の発露であると同時に、女という種を、その気持ちが把握できない別種のものとする他者化の過程でもある。また、一郎は二郎やHには無条件の信頼をよせており、「血縁」と「同性」を優先視する男性共同体を作っている。主人公・一郎にとっては自己規制しない自然人としての女性こそが好感の対象であり、それは女性から自己表現の能力を奪おうとする欲望である。しかし、心を覗こうとする一郎に対してますます武装し、自己の中に深く沈潜していくお直の「強さ」は、二郎にとっても一郎にとっても「恐ろしい」恐怖の対象である。そして、二人にとって理性をともなった忍耐強い女はミソジニーの対象でしかなかったと結論付けられている。

「第十二章 『行人』と沼波武夫『始めて確信し得たる全実在』においては、沼波武夫の『始めて確信し得たる全実在』が『行人』に与えた影響について実証的な論が展開されている。

第十一章については『行人』における女性嫌悪と男性共同体の問題に焦点があるが、これについて審査委員の中から、先行研究である飯田祐子『彼らの物語』との観点の差異をよりいっそう明確化すべきではないかとの意見が出された。第十二章については、その独自の観点および手堅い実証性が高く評価された。

## 第十三章 個人主義の破綻——『心』

本章では、『心』を「明治」の差異化の試みと捉え、主人公である先生によって「明治」という時代が「倫理」的時代として価値化され、それに殉死した自らや乃木の死も「倫理的」は「現代」を批判する構造になっているとの指摘がなされている。『心』において、「明治の精神」とは個の身体性より公の観念性を優先することであり、自己を優先してはならないという価値観が提示されている。Kの死の直接の原因は、「恋愛」に触れる

ことを「精神」向上に反する行為とみなす男性共同体のイデオロギーゆえのことであった。彼らにとって女性は、気になる存在でありながら、表象を禁じられた意識下に葬られるべき存在である。後に先生が内面の告白の対象を妻にではなく、男性である「私」に求めるのもそのためである。男性たちの「高尚」な「精神」の争闘から女性は排除されていたのである。そういう意味で「心」とはあくまでも「男」の心であり、「若い」「私」が選択されたもうひとつの理由は「次世代」を必要とする民族・国家的発想にあった。保田与重郎は「明治の精神」を「尊王」のころとし、「西洋化」が「個人主義」一利己主義を蔓延させてそれを歪めたとしたが、漱石の「現代」批判も同様の文脈にある。当時は乃木の殉死が批判されてもいて、実は「明治」は一様ではなかったが、その中から「国家」への求心性を大きくクローズアップしたのが漱石の『心』だった。『心』が大きく評価されたのは明治百周年となる一九六〇年代後半においてのことで、それは「明治」を新たに蘇らせる、明治の記憶化作業であり、オリンピック開催を無事済ませ経済大国へと進入した、戦後日本の新たな主体確認の作業でもあった。そこで、西洋文明を批判して「自己本位」を強調していた漱石が、「文豪」として押し上げられたのである。漱石の言説への再評価は、日本が武力面だけでなく精神面でも先進国であることを証明してくれることを願ったことだった。

論者は、漱石が大正期にいたって世界にほこるべき「文豪」を必要とした日本によって選ばれた人物であると捉える。とりわけ「明治の精神」を語る『心』は、現在でも「日本」という主体確認の欲望を満たしてくれるテキストとして利用されているとした上で、そこで言われる「公」の精神が現代の自由主義史観と酷似しているだけに漱石批判は必要であると説いている。審査委員会では、本章の『心』批判において、一連の作品論が現代日本のナショナリズム批判へと接合するところに、本論文が漱石研究の枠組みに止まらない、アクチュアリティを有していると評価された。

## 第二部 ナショナル・アイデンティティの諸問題

### 第十四章 「国医」 鷗外の選択——『舞姫』

本章では、『舞姫』を、一度「西洋」の女を棄てることで確立されるべき「東洋」の国家的男性自我の物語であると論じている。主人公・豊太郎にとってドイツはまず「西洋」



であり、その西洋は豊太郎にとって驚くほどに美しい場所だったが、そのことに心を奪われまいと自制する。「勇気」をもたない豊太郎がエリスに接近できたのは、エリスが「泣いて」いる「少女」であるという、自分より「弱い」立場にいたからである。そこでは自らの「黄なる面」を意識させる負としての「東洋」は忘れていられたのである。エリスは貧しく、十分な教育を受けておらず、さらに「訛」を使うということにおいて、標準語を使う東洋のエリート豊太郎にくらべて劣る位置にいる。それは「東洋」の青年と「西洋」の少女を「師弟」関係にすることで「西洋」と「東洋」の位置関係を逆転させていた。豊太郎にとってエリスとの生活は「個」の生活であり、職場を失ったのは仕事や国家という「公」から身を引いたことでもあったが、相沢は「仕事」に生きるべき「男性」としての生き方を強調することで成功に結びつかない「愛」の排除にとりかかる。ここでは男同士の約束が女との約束より優位におかれるべきものとされていた。エリスを棄てるのが可能だったのは「狂人」となったからだが、それは「狂人」の排除という近代国家プロジェクトに加担する行為であり、それは国家によって統御される「個」の悲惨な姿でもある。豊太郎がエリスを棄てたのは個人的な功名心よりは「日本」という国家に有用な人物になろうとする欲望ゆえのことだったが、それはあらゆる価値の上に「故郷」や「国家」がおかれるべき言説が台頭した時代を背景においていた。

本章で論者は、『舞姫』の作品分析と連動させて、同作品を明治知識人の仕方なき選択として受け取った近代日本の『舞姫』受容にも着目し、これを鷗外が提示した国家意識を内面化する過程であると批判している。これはとりもなおさず「近代的自我」が「個」のレベルにおいてではなく、むしろナショナル・アイデンティティのレベルにおいて発見されていたことにも繋がっている。ナショナル・アイデンティティ以外の自我のあり方を抑圧する過程を指摘する本章は、『舞姫』研究史には欠落していた視座を提示したものとして、審査委員から評価する発言があった。

## 第十五章 柳宗悦と近代韓国の自己構築について

本章では、白樺派の同人でもあった柳宗悦の「朝鮮」に関連する随筆および評論を取上げている。これら柳の言説は、当時の日本の知識人としてはまれに見る好意的なものとして、韓国では発表当時から今日も高い評価を受け、学校教科書の教材にも採択されている。柳は軍国主義を批判し、日本が植民地に対して「愛」の姿勢で接すべきだと

主張し、その手段として「特殊性」に注目するが、それは最終的には朝鮮を日本に同化させることを目指すものだった。その「一致」を可能とするために抑圧的な姿勢でない、「愛」に基づいた柔和政策を唱えていたのである。それは「力」ではなく「情」の日本像、それまでの「政治」的の日本像のかわりに文化や芸術に裏打ちされた日本像を構築しようとするものだった。柳は朝鮮の特質を、「陶器」に涙の訴えや「女」を見出すような本質主義的な修辞を援用して語っている。また、そのような本質主義的な語りは、朝鮮だけでなく中国や台湾、沖縄、アイヌを対象にしても発揮されていた。対象となる地域に、たとえ政治的に滅びても、文化的には永続性があるといった錯覚をもたらして抵抗を防ごうとしたのである。

日本の「民芸」を発見したエリートたちは「民衆」を価値化することで「近代」国家統合に寄与したが、そこにはその価値を見出す目をもつ「文明人」としての自己意識があった。それは、西洋的文明化に対抗しうる「固有」で「太古」的な美を発見しようとするプリミティブへの欲望に支えられており、すでに西洋化してしまった都会（日本）の代わりに、彼らにその部分を残しておくことで「西洋」に対抗し得る「東洋」という言説をつくり出すことでもあった。

論者は、朝鮮に近代以前の野蛮な「自然」をみようとする柳の試みを、韓国の日本への同化を推進しながらも敢えて差異を強調することで差別の根拠を作っていると批判し、そこに日韓の文化を相互参照しつつ主体を構築して行く日本の近代化のマトリックスを見ている。そのみならず、本章では近代韓国がこうした柳によって提示された像を内面化し、次の段階として力のある男性美を具えた自己を構築することで、柳のやり方を模倣していると指摘した。これは審査報告書の「本論の目的と構成」の項で前述した通り、朴氏の韓国ナショナリズムへの論考とも響き合い、氏が普遍的な近代化の問題の一環として、本論文を執筆していることの証左である。

## 第十六章 <在日>作家金鶴泳の沈黙

本章では、在日朝鮮人作家・金鶴泳の小説「凍える口」を中心として、金の評論や随筆が論考の対象とされ、そこに表象された日本人と朝鮮人の両方によるナショナル・アイデンティティの強制についての分析が展開されている。これまで金鶴泳に対しては、朝鮮の批評家たちからは伝統的価値観の希薄さが批判の対象となり、また日本人批評家

たちからは朝鮮人問題の扱いの不充分さが再三指摘されてきた。「凍える口」では、主人公・催が、そのした要求に対応するかのように、朝鮮のことを学んでいく。しかしその過程が図らずも示しているのは、ナショナル・アイデンティティなるものが「学習」によって習得されるものであり、吃音という個人的な悩みを抱えている催にはそうした学習の過程が「憂鬱なもの」でしかないという側面を看過すべきではないという点である。

本章では、「在日」が「在日」として認識されたのが一九六〇年代の後半だったのは、日本が新たな自己構築をすべき時期だったからで、内部の他者を区別しておく必要があったからだとの認識を踏まえ、金鶴泳のテキストに表象されている自殺の衝動を、居場所を得られず自身の「弱さ」に意味を見出し得なかった帰結であると捉えている。加えて金鶴泳のテキストに、自らの存続のために「強い」人間を育てようとし、弱い人間の居場所をつくろうとはしなかった近代国家への意義申し立てを読んでいる。

論者は、金鶴泳に対する朝鮮批評家たちからの批判を、弱いものの存在の意義を教えられなかった弱い者たちが自分より弱い者に対して加害者となる暴力性の現れであるとしたが、これに対しては、審査委員から、竹田青嗣の金鶴泳評価との差異を示す必要性が指摘されたほか、ナショナル・アイデンティティの視座から論ずるのであれば、金鶴泳の文学テキストの分析とともに、彼のメディア戦略の分析が不可欠であるとの課題も提起された。

## 第十七章 植民地末期韓国文学に見る「日本」のイメージ

本章では、李光洙や徐ジョンジュらに代表される近代韓国の植民地末期韓国文学の諸相を紹介しながら、「日本人」になることを強制されていた彼らにとっての「日本」像と、それらを習得する過程とが追尋されている。李光洙のテキストにおいては、「日本」とは規則正しい生活であり、日常生活における静粛さであり、宮城遥拝に代表される「国民生活」の秩序と規律の世界だった。大人たちには「日本」「国民」としての生活はすぐに習得できるものでなかったが、子供たちはたやすく、早くに習得している。また、韓国の戦後最大の詩人と言われている徐ジョンジュの短編には妻に死なれた男と息子、そして母親が登場するが、そこでも日本は「秩序的世界」として表象され、それをいち早く子供は内面化している。「日本人」とは、「日本語」の使用と日本という共同体が必要としていた「規範」を身につけることで誰にでも可能なものだったのである。

韓国にとってはすべてのことに「熱心」と「誠」を尽くすやり方が「日本」だったが、それは「天皇」の存在を意識することとも不可分であった。「日本」精神とは、まさに尊皇の精神だったのである。それは具体的には、時間を無駄遣いしない勤勉さであり、「個」の所有を否定してすべてのものを天皇のものと考えたことだった。それは家族までも及び、「兄」も「夫」も「息子」も天皇のものと考えられていた。「尊王精神」＝日本精神とは、「個」の所有を放棄する精神であり「全体」＝「公」を優先する精神でもあったのである。個人の仕事さえも国家のための仕事と考えるのが、「日本」であり、李光洙は、それに反することを（西洋からの）「個人主義」「自由主義」といって攻撃している。

「秩序」と「規律」は天皇を求心点とするものだったが、飼いならされていない、「野蛮」な韓国としては「近代」を取り入れるためにも秩序と規律の内面化は必要と思われていた。儒教的価値観によって「忠」より「孝」のほうを優先視していた韓国人たちは、天皇のために命をささげることの矛盾を「忠」＝「大孝」と考えることで解決し、「忠孝の一致」を果たし、すべての懐疑を隠蔽することで「日本」人としてのナショナル・アイデンティティを樹立しようとしたのである。

論者は、本章のテキスト分析の結論部において、韓国の男性たちの在り方を、「命をささげる」ことを男性にのみ与えられた特権と考えることで女性たちの優位に立ち、先に、そして確実に日本国民たらんとしたと意味付け、韓国の男性たちが自国の女性たちをナショナル・アイデンティティにおいて排除することで帝国主義と共謀していたことを示している。審査委員からは、この指摘は、近代ナショナリズムとジェンダーの問題を考察する上で、極めて示唆に富む重要な観点であると高い評価がなされた。

## 第十八章 ハイブリディティとしての近代—ワシントン・アービングと日本近代文学

本章では、明治時代、圧倒的な人気と支持を得ていたワシントン・アービングの『スケッチ・ブック』の受容について、実証的な論究がなされている。森田思軒や森鷗外の翻訳にはじまるその受容は、今日においてはほとんど忘れ去られているが、当時においてはアービングはアメリカを代表する作家として紹介されていた。その受容は主に英語教科書をとおした原語からの受容だったが、『スケッチ・ブック』は「文章」の手本とされ、日本語文脈の欧文化の一翼を担ってもいたと考えられる。近代人の複雑な思考の表現には「西洋」の文体こそが合っていると主張されていた時代でもあってそれは肯定的に受

け取られる側面もあった。やがて、「文章」が「文学」として価値化されていく中で『スケッチ・ブック』は「文学」を志す青年たちの必携書のように扱われ、文学青年たちは志向すべき「文体」や「文学」をアービングの『スケッチ・ブック』から見るようになる。絵画技法としての「スケッチ」が、明治政府の美術教育への尽力とともに世間で流行していたことも『スケッチ・ブック』の圧倒的な支持の背景にあったと考えられる。

論者は、「近代」文学の「手本」を『スケッチ・ブック』にみだし、欧文体化された文体で「近代文学」が書かれたことに、「日本」および「近代文学」の歴史性——それが日本固有の特殊性に裏打ちされたものではなく、極めてハイブリッドに創出されたものであることを明かにしている。

続く「第十九章 結びにかえて」において、ナショナル・アイデンティティが、男性中心主義・異性愛主義・秩序主義と相互に連携し、外部にたいする自国の優越を保証する「誇り」の表象として、「文化」＝「文学」を求めさせた結論しているが、表象するための具体的な描写の局面においては、さまざまな先行する言説を都合よく混交していることにも注意を喚起しているのである。本論文の終盤に、日本におけるアービングの『スケッチ・ブック』受容史が配されている所以である。審査委員会では、本論文において資料を博搜した第十八章の持つ意義の大きさが、改めて確認された。

### 3、総評

本論文は、夏目漱石を中心に、日本近代文学あるいは日本語で書かれた文学テキストの分析を通して、日本的ナショナリズムとそれを支えるナショナル・アイデンティティの意識が、文学テキストにいかにかに投影し、それをどのように歪め抑圧しているかを、批判的に検証しようとするものである。

論者は、すでに優れた漱石研究者として定評があるが、本論文全体の三分の二を占める漱石論は、単なる漱石研究ではなく、従来の漱石研究が国民作家・文豪漱石という表象をつくり上げる過程で、意識的・無意識的に隠蔽してきたもの——西洋への対抗意識に発しつつも、漱石テキストが「国家」統合のための「秩序」志向と強者意識によって、女性や田舎や無教養な大衆、さらにはアジアの人々を排除し、差別している側面を可視化することを目指すものである。従来高く評価されてきた漱石の文明批評の背後に、西洋に対する擬似植民地的恐怖という閉じられたナショナリズムを指摘するとともに、そ

の西洋恐怖は一方でアジアへの「侵略」を容認するものであり、その個人主義も国家主義を容認する秩序的個人主義という側面を有していたことを、詳細な言説分析に立脚し論証している。そのことは、たとえば『草枕』における「東洋回帰」の孕む矛盾や、『坊っちゃん』の田舎への差別を踏まえて、これらの作品がナショナル・アイデンティティによる排除と囲い込みの物語だとする読みによっても明らかにされている。

さらに、漱石の「自己本位」や近代主義の内実は、『満韓ところへ』の分析によって、最も鋭く剔抉される。論者によれば、そもそもナショナル・アイデンティティとは、ハイブリッドなものであり、幻想にすぎないのである。

もとより、論者は漱石テキストを否定的にのみ論じているのではない。論者のナショナリズムについての批判の文脈にそえば、論者が漱石における個人主義の可能性を、共同体的規範よりも自己の価値観に模索した『それから』に見ようとするのは当然であろう。しかし、その可能性も、『門』で、近代家族の抑圧に呪縛され、結果的に家父長的秩序を志向したことによって閉ざされることになるのは言うまでもない。

本論文は、漱石テキストに関する重要な実証的発見も含んでいる。たとえば、『門』における女性観や結婚と子供との関係にショーペンハウエルの影響を指摘し、『行人』の成立の背景に沼波武夫の著書の投影をみていることなどがそれで、研究者としての論者の幅広さ・奥行きを深さを示すものとして評価される。

さて、近代日本は漱石を「文豪」として規範化した。論者は一九六〇年代後半の明治百周年前後から、「明治の精神」を喚起する『心』が大きく問題化され、続いて漱石ブームが起こったことに注意を促すとともに、それが「戦後日本の新たな主体的確認の欲望」に基づくものであるという見解を提示している。

本論文は、漱石研究という観点から見れば、論理的に一貫しているぶんだけ一面的なところもなくはないが、考察はテキストの厳密な読みと資料の博搜によって支えられ、先行研究の検討も周到かつ的確に行われており、現在の漱石研究の死角になっていた部分を前景化するものとして十分な説得力をもっている。

漱石以外の日本人のテキストとしては、森鷗外と柳宗悦が取り上げられている。特に柳についての論は、日本近代文学学会にゲスト・スピーカーとして招かれて発表した当時から注目されていたものである。周知のように、柳の朝鮮観は、当代知識人としては例外的に好意的なものであったが、その「特殊性」への注目は、結局、「愛」に基づく「一致」への柔和政策であり、「情」的文化的日本像の構築に加担するものであったと述べら

れている。それは「同化」を目指しつつ「差別」の根拠を作るもので、論者はそこに柳の朝鮮観に隠された植民地支配的発想をみようとするのである。近代韓国は柳の提示した朝鮮像を内面化していったが、一方植民地下での朝鮮人や戦後の「在日」韓国人・朝鮮人は、日本と朝鮮・韓国という、二つのナショナル・アイデンティティの強制に引き裂かれた存在であった。そのナショナル・アイデンティティを「学習」によって身につけなければならなかった「在日」朝鮮人の憂鬱を、ほかならぬ日本語で表現した「在日」作家・金鶴泳の沈黙と自殺が、ナショナル・アイデンティティの強制と強者主義の暴力によるものであったように、「日本人」になることを強いられた植民地末期の韓国文学の場合も、事情は基本的に変わらなかった。

論者のナショナリズム批判は、排除や差別のない、あるべき共同体を模索するためになされるものであるが、それが日本人の「外部」ないしは「他者」の視点を自覚的に選択して、実証に裏付けられた明晰な論理によって展開されているところに、その独自性がある。

先述したように、本論文はテーマの性質上、いささか一面的なところもあるが、これらの研究を前提として、より全体的な漱石論の構築とともに、第二部の内容もさらに対象を広げていくことが望まれる。論者の研究者としての優れた資質からすれば、それは十分に可能であろう。最後に、先にも触れたが論者には韓国における反日ナショナリズムを内部から批判した評論『誰が日本を歪めるのか——世紀末韓国精神分析——』（2000年）という著書があることと、本論文がほとんど欠点のない正確な日本語によって書かれていることを付け加えておきたい。

審査委員会は、面接試問を含めて慎重な審査を重ねた結果、本論文が十分に博士（学術）の称号を授与するに相応しいものであることを、会員一致で確認した。

主査：	早稲田大学教授	東郷	克美
副査：	早稲田大学教授	千葉	俊二
副査：	早稲田大学教授	金井	景子
副査：	早稲田大学名誉教授	榎本	隆司
副査：	東京大学教授	小森	陽一